

[新刊紹介] 皇居吹上御苑，東御苑の四季，植物の生存戦略「じっとしているという知恵」に学ぶ，植物の学名を読み解く - リンネの「二名法」，生物学名辞典，国際栽培植物命名規約第7版 [日本語版]，リンネと博物学 自然誌科学の源流 [増補改訂]，南太平洋のシダ植物図鑑，葉っぱのふしぎ：緑色に秘められたしくみと働き，Les Roses バラ図譜，栃木県の自然の変貌：自然の保全はこれでよいのか，海から来た植物 - 黒潮が運んだ花たち - ，種を記載する：生物学者のための実際的な分類手順

著者	鳴橋 直弘，佐藤 杏子，植田 邦彦，中田 政司
著者別表示	Naruhashi Naohiro, Sato Kyoko, Ueda Kunihiko, Nakata Masashi
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	56
号	1
ページ	47-50
発行年	2008-09-30
URL	http://doi.org/10.24517/00053390



新刊紹介

- 近田文弘：皇居吹上御苑，東御苑の四季 B5判，189頁，2007年3月30日，日本放送出版協会，2,900円。

本書は，日本の心臓，東京都の都心に浮かぶ緑の島，皇居の森と植物を紹介した本である。

本は，序章 都心に浮かぶ緑の島，皇居，第1章 吹上御苑とその周辺（巨木が茂る森，生物多様性の保存庫である水辺と草地，武蔵野の植物が生える草地とクヌギ林，日本文化の伝統が生きる見事な庭園），第2章 東御苑とその周辺地域（本丸・四季の植物，二の丸・四季の植物），第3章 皇居外苑地区と北の丸，からなる。巻頭部2-8頁に大小のきれいな17枚のカラー写真があり，巻尾に参考文献と植物の索引がある。

東京は世界でも屈指の大都会である。毎年高層ビルが雨後のタケノコの如く出現している。そんな中で唯一巨大な緑の空間が皇居である。東御苑は一般に公開されているが，この本は未公開の吹上御苑について書かれている。吹上御苑の巨木の森が持つ意味を，‘人と自然の営みがつくり上げた“人と自然の複合遺産”と呼ぶべき一種の文化財ということである’と著者はいう。

著者は国立科学博物館名誉研究員であり，本書は1996年より2006年まで，皇居の森を隈無く調査された結果に基づくとする。随所にあるカラー写真は奇麗であり，文章も読みやすく，興味をそそる内容である。

（鳴橋直弘）

- 「植物の軸と情報」特定領域研究班（編）：植物の生存戦略 「じっとしているという知恵」に学ぶ B6判，234頁，2007年5月25日，朝日新聞社，1,200円。

本書は，植物の発生についての先端研究の成果をやさしく解説した本である。

植物の発生について，先端的研究を行うべく結成された文部科学省の「植物の軸と情報」特定領域研究班は，植物の形づくりの仕組みを，植物の「軸」とその軸の形成を支える「情報」の観点から解くことを目的とした研究グループである。彼ら80名のなかから10名が次のようなテーマで執筆している。第1章 田坂昌生：植物と動物 どこが違うのか，第2章 塚谷裕一：葉の形を決めるもの，第3章 荒木 崇：花を咲かせる仕組み「花成ホルモン」フロリゲンの探索，第4章 平野博之：遺伝子の働きによる花の形づくり，第5章 東山哲也：受精のメカニズムをとらえた！，第6章 深城英弘：根 植物の隠れた半分，第7章 川口正代司：根における共生のいとなみ，第8章 福田裕穂：4億年の歴史をもつ維管束，第9章 森 仁志：成長をつづけるためのしたたかな戦略，第10章 芦荻基行：「第2の緑の革命」に向けて。

‘本書を一読のとおり，本書を通読していただくだけで，植物の一生と植物科学の意味がわかる話題ばかりです’と‘あとがき’にある。‘また，現役の第一線の植物科学の「いま」を伝える本ができた’と。第一線の研究者が執筆しただけあって，内容は深いものばかりで，教えられることが多い。植物に興味を持つ読者には，ぜひ読んでいただきたい本である。

（鳴橋直弘）

- 田中 學：植物の学名を読み解くーリンネの「二名法」ー A5判，236頁，2007年6月30日，朝日新聞社，2,800円。

本書は，日本産植物の学名を理解するための解説書である。

第1章 学名とその表記について，第2章 植物の学名，第3章 属名と種小名，第4章 学名に名を残す日本植物研究の先駆者達（1），第5章 学名に名を残す日本植物研究の先駆者達（2），第6章 学名に名を残す日本人植物研究者達ー日本人名に由来する属名・種小名ー，第7章 日本植物：学名あれこれ，第8章 日本植物：学名探訪（263種）ー植物の特徴を示す属名・種小名ー，と‘リンネが命名した属名’，‘女性名詞扱いの属’などの11のコラムからなる。巻尾に植物学名に関する参考文献がある。また，本書を購入すると，希望者には実費+送料で，CD-ROM版「日本産野生植物：植物学名一覧」を送付して貰える。

学名の読み方（発音の仕方）が書かれていたり，随所に多くの本が引用されていており，もっと知りたい読者には都合が良い。日本の植物研究には多くの外国人が関与してきたが，本書を読むことで大まかにこれらの人々のことが理解されるだろう。種の学名は，属名とその後続く1つの種形容語の2つの語からなっており，それらはラテン語からラテン語化した語である。その意味がわかれば，学名は覚えやすい。そのために，この本は大いに手助けとなるだろう。

（鳴橋直弘）

- 平嶋義宏：生物学名辞典 A5変形判，1,292頁，2007年7月20日，東京大学出版会，45,000円。

本書は，動植物に関する学名の語源と意味を解説した学名辞典である。約35,000語におよぶ用語が索引に

収録されているという。

本は、本書の特徴と使い方について、次の 12 章がある。古典語の変化語尾、接頭語、接尾語、縮小辞、一般的な形容詞、色に関する用語、形と寸法に関する用語、表面構造に関する用語、動物体の構造に関する用語、植物の構造に関する用語、環境に関する用語、動物の行動に関する用語。さらに巻尾に、参考文献、付図の出版、高次分類群名索引、属名索引、種小名索引、和名索引がある。345 の図があり、119 の囲み記事がある。これでよいのかダンドボロギクの学名、Neo-が「新しい」とばかりは限らない、タクソンとは何か：動物学と植物学の違いなど、読んでおもしろい囲み記事が多い。

植物の学名のエピソードにしばしば *ferox* があるので、この辞典で調べて見た。‘凶暴な’、‘大胆不敵な’、‘気性の荒い’、という意味であることが出ている。いずれも動物の学名に使用されたものである。ちなみに *ferox* は植物では‘ひどい刺の植物’を意味している。さすが著者は昆虫学者だけのことはあって、動物に関する言葉は豊富である。しかし、植物の語彙が少ないのは残念である。高価過ぎて個人ではなかなか購入できない。
(鳴橋直弘)

○ 大場秀章 (監修)、特定非営利活動法人 栽培植物分類名称研究所 (訳) 国際園芸学会：国際栽培植物命名規約 第 7 版 [日本語版] 菊判、160 頁、2008 年 2 月 10 日、アボック社、14,286 円。

本書は、1998 年 7 月と 2002 年 8 月に、国際生物科学連合栽培植物命名法委員会が採択された、栽培植物命名のための規則と勧告を載せる『国際栽培植物命名規約』を日本語に翻訳した本である。

本は、序文、前文、第 I 部 原則、第 II 部 規則と勧告 (第 I 章 総則、第 II 章 定義、第 III 章 地位の表示、第 IV 章 優先権の原則の制限、第 V 章 栽培植物の命名、第 VI 章 発表と正式発表、第 VII 章 名前の選択、名前の再使用、名前の廃棄、第 VIII 章 翻訳、翻字、書換え、第 IX 章 綴り)、第 III 部 雑種属の名前、第 IV 部 名前の登録、第 V 部 スタンダード標本、第 VI 部 規約の修正、附録 I 国際栽培品種登録機関 (ICRAs) 一覧、附録 II 種苗登録行政機関一覧、附録 III 特定の適用分類群、附録 IV スタンダード標本が保持される場所、用語解説、植物名索引、事項からなる。

オーゴンセトウチギボウシは、*Hosta pycnophylla* F. Maek. の黄色い葉の栽培品種であるが、以前は *Hosta pycnophylla* cv. *Ōgon-Setouchi* Gibōshi と表記されていたが、本規則の下、品種名は *Hosta pycnophylla* ‘Setouchi’ となるという。

日本語の品種名、例えば“青海”をローマ字に書き換える時は、Oomi, Oumi, Ohmi, Ōmi, Omi か迷うところである。これは、第 31 条によって、修正ヘボン式ローマ字表記法と長音符によって、Ōmi となる。

通常、規約を読んでもすぐには理解できないことが多い。そんなとき、具体的なものに当たって初めて理解されることがある。ところで、本書の本文中の注と実例の文章の文字は小さく、読みづらく、また本としてもかなり高価である。
(鳴橋直弘)

○ 千葉県立中央博物館 (編)：リンネと博物学—自然誌科学の源流—〔増補改訂〕 A4 判変形、320 頁、2008 年 2 月 10 日、文一総合出版、15,000 円。

本書は、1994 年に千葉県立中央博物館で開催された特別展「リンネと博物学—自然誌科学の源流—」の図録をベースに、2007 年のリンネ生誕 300 年を記念して大幅に増補改訂された、リンネによる功績の解説本である。本書は、巻頭に魚類の分類学者としても活躍される天皇陛下が 2007 年 5 月にロンドン・リンネ協会からの招待を受けてご講演された原文前文が掲載され、続いて 1. リンネのしごと 1、2. リンネのしごと 2、3. リンネコレクションから、4. 自然誌科学の源流、リンネ、および資料から成る。

「1. リンネのしごと 1」では、近代生物分類学の父と呼ばれるスウェーデンの科学者、カール・フォン・リンネの代表作「自然の体系」(初版)の全頁オリジナルカラー写真と日本語訳が掲載されている。リンネは、わずか 12 頁のこの本に、動物・植物・鉱物など、自然界のすべてをどのように体系的に分類すべきかについてまとめた。本章ではまさに自然誌科学の源流そのものに触れることができよう。「2. リンネのしごと 2」では、リンネの著作および関連論文が紹介され、一つ一つについて解説されている。「3. リンネコレクションから」では、植物画を中心とした貴重な図版の数々が紙面を惜しみなく使い紹介されている。「4. 自然誌科学の源流、リンネ」では、リンネ自身および彼の業績に対する認識や評価が、時代背景や分野別にさまざまな角度から解説されている。巻末の「資料」では、関係年表、学位・口述論文目録、索引がまとめられている。

この本を通して、多くの資料と解説から導かれるリンネの業績の詳細を知ることができるのはもちろんのこと、美しい図版のほかにリンネ直筆の書簡や「自然の体系」(初版)の手稿が掲載されており、眺めているだ

けでも十分に楽しめるものとなっている。

(佐藤杏子)

○ 国立科学博物館：南太平洋のシダ植物図鑑 B5判, 296頁, 2008年4月20日, 東海大学出版会, 8,200円。

本書は, 南太平洋上に散らばる島々, ニューカレドニア, パヌアツ, フィジー, サモアの4島嶼のシダ植物図鑑である。編集委員会は, 国立科学博物館筑波実験植物園と日本シダの会南太平洋シダ研究会のメンバーから構成されている。

この地域の記録されたシダ植物は, 約630種で, メンバーが観察, 確認できたのは約550種。この本ではその中の537種が取り上げられているという。

本は, まえがき, 南太平洋と主要島嶼地図, 南太平洋の島々の自然とシダ, 新しいシダ植物の分類, の前編部と, 南太平洋のシダ植物検索と図集, 凡例, ヒカゲノカズラ科(5頁)からウラボシ科(275頁)の本編, および南太平洋のシダ植物研究略史と参考文献, 謝辞, 索引の後編部からなる。本編の各科では, 科の説明, 属の検索, 属の説明, 種の検索, 種の学名, この地域での分布, 種の説明(大きさや生育分布, また種についての見分け方など特記事項が記載), その種の掲載されている図版の番号と描画に利用された標本の登録番号がある。巻頭部の頁xiv-xxviにシダ植物のカラーの生育写真がある。この本で取り上げられた植物のすべてに線画があるのはうれしいことである。

屋久島でコブランを, 小笠原でカンザシワラビを, 与那国でミモチシダを, 台湾でヤブレガサウラボシを, 見た時の感動は筆者には忘れられない。南太平洋上の島々にこれほど多様なシダ植物が生育しているとは驚きである。この地域の適切なシダ植物図鑑がなかっただけに, この本はシダに興味を持つ者にはなくてはならない本である。

(鳴橋直弘)

○ 田中 修：葉っぱのふしぎ 緑色に秘められたしくみと働き 新書版変形, 214頁, 2008年4月24日, ソフトバンク クリエイティブ, 952円。

本書は, 葉の生理についてやさしく解説した本である。

本書は次の7話からなる。第1話 葉っぱがおこしたミステリー, 第2話 時を刻む葉っぱ, 第3話 光の色を見分ける葉っぱ, 第4話 働き者の葉っぱ, 第5話 葉っぱのパワー, 第6話 葉っぱの悩み, 第7話 葉っぱの運動。

たとえば本書には, 秋にサクラの開花があるのは, 夏に毛虫や台風によって葉が無くなった時, 秋に葉がないため夜の長さが感じられず, よってアブシジン酸が作られず, そのため, 蕾は越冬芽になれず, 花が咲いてしまうこと。エチレンによってパイナップルに, ジベレリンによってダイコンやキャベツに, アスピリンによってウキクサに, 蕾を付けさせること。光合成で発生する酸素は空中の二酸化炭素ではなく土中の水から由来すること。植物は, 通常, 水不足の状態にあり, そのために成長が抑制されていること。などが分かりやすく説明されている。本書にはふんだんに大きなイラストがあり, 中・高校生でも理解できる葉の働きの入門書である。

(鳴橋直弘)

○ ピエール=ジョゼフ・ルドゥーテ：Les Roses バラ図譜 A3変形判, 184頁, 2008年5月20日, 河出書房新社, 14,000円。

本書は世界的に有名なルドゥーテの『バラ図譜』の原寸大の復刻版である。

初版本は1817~1824年に出版されたもので, 点刻彫版多色刷りの銅版画の上から水彩絵の具で手彩色を施されたものである。

本は, 口絵1頁, ルドゥーテの肖像画1頁, 表題1頁, バラの絵169頁, 上田善弘氏の解説4頁, 索引2頁からなる。

ナポレオンの妻ジョセフィーヌはパリ郊外のマルメゾンに植物園を作った。そこで彼女は約250種ものバラを熱狂的に収集した。それらのバラを描いたのが天才画家と言われるルドゥーテであった。ここで描かれたバラはその当時栽培されていたバラである。これをバラの園芸史的に見ると, 野生種と古いバラ, 中世のバラ, およびオールドローズだと言われる。これらの描かれたバラの中には現存しない品種もあり, バラの品種の図鑑としても重要な価値をもつ。

初版本をもとに, 現在日本の最高の印刷技術を駆使し, 作成されただけあって, 本の絵は奇麗であり, 装丁や製本もよく, その造本のわりに価格も高くはない。バラ愛好家のみならず, ボタニカルアートとしても価値

があり、一般の方でも見ている楽しい本である。

(鳴橋直弘)

○ 長谷川順一：**栃木県の自然の変貌 自然の保全はこれでよいのか** B5判, 181頁, 2008年5月30日, 自刊, 2,835円。

本会会員である長谷川順一氏が、栃木県の、植物を中心とした自然を長年に渡ってとことん観察されてきた集大成として纏められた充実の一冊である。曖昧な記憶に頼った論評などとは異なり、かつての調査結果が丁寧な写真記録とともに示された上で、現在との比較がなされ、しかもその原因について科学的で冷静な言及がなされている。実に「重い」本である。特に近年のシカによる被害がすでに「待った無し」を通り越し「手遅れ」に近い状態にまで放置されている状況がつぶさに示されている。誤った極めて偏った動物愛護勢力のために、その動物自体の未来も含めて、自然がゆがめられてしまっているかが静かに語られている。行政に直接携わっている人のみに関わらず関係者全員が真摯に本書を読み尽くすべきであろう。

購入ご希望の方は葉書にて著者宛に申し込まれるとよい。著者の住所は 〒320-0052 宇都宮市中戸祭町 767-2。
(植田邦彦)

○ 中西弘樹：**海から来た植物—黒潮が運んだ花たち—** B6判, 319頁, 2008年6月25日, 八坂書房, 2,600円。

長年にわたって海岸植物の生態や海流散布植物について研究してきた著者が特に魅せられた植物、ハマユウとハマボウについて様々な角度から紹介した本である。

本書は3部から成っていて、第1部では、海流で運ばれる果実や種子の種類や特徴、ハマユウとハマボウを含む海流散布植物の生態や分類など植物学的内容が図や写真とともに解説されている。一転して第2部では、ハマユウとハマボウに関する文学、歴史、民俗、名前の由来といった人との関わりに焦点を当てた話題が提供されており、9章の柿本人麿のハマユウの歌の解釈や10章のシーボルト『フロラ・ヤポニカ』にあるハマボウの画の誤りなどは謎ときの面白さがある。第3部では、今日的な話題である生物多様性や自然保護といった問題が取り扱われ、ハマユウとハマボウの現在と未来が語られている。本書は海岸植物ハマユウとハマボウに焦点を当てたものではあるが、専門に偏ることなく丁寧に背景が解説されており、古典文学、江戸時代の本草学と園芸文化、シーボルトの時代の植物学、現在の保全生態学の考え方など、植物に関わる幅広い知識を得ることができる優れた教養書でもある。内容を詳しく知りたい読者へは、巻末の引用文献が参考になる。
(中田政司)

○ ジュディス・E・ウィンストン (著) 馬渡俊輔・柁原 宏 (訳)：**種を記載する 生物学者のための実際的な分類手順** A5判, 653頁, 2008年6月30日, 新井書院, 7,800円。

本書は、新種を発見したら、その生物を新種として記載、発表するための命名法的な手順や方法を解説した本である。

本編は、第1部 序論(第1章 はじめに、第2章 生物命名法)、第2部 種を認識する(第3章 種とその発見、第4章 同一性の確立：文献調査、第5章 同一性の確立：博物館標本の利用)、第3部 種の記載の執筆(第6章 分類学における種の記載、第7章 見出しと異名表、第8章 種を命名する：語源学、第9章 タイプ標本と証拠標本、第10章 判別文、第11章 記載、第12章 分類学的考察の節、第13章 生態学の節、第14章 出現と分布、第15章 調査した材料、第16章 出版、第4部 種の記載を超えて(第17章 亜種、第18章 属レベルの記載とリビジョン、第19章 検索表、第20章 高次タクソンの記載、第21章 よくある問題、第22章 体系学における発展的研究)からなる。

各章の最後に出典がある。'出典'として1項目の下に文献が挙げられている場合もあるが、多くの章では、印刷物、その他の読み物、インターネット、一般、動物、植物、化石等に分けて文献を挙げている。また、巻末に引用文献として多数の文献がある。ある生物群に関して分類学的に纏めたものに、シノプシス、レビュー、カタログ、リビジョン、モノグラフがあるが、それらの違いについても書かれている。

'分類学とは、生物群の特徴を記述し、それを他から区別し、人類の知識体系の中に位置づける学問である。学問行為としてその基礎を成すのは「記載」であり、「記載論文の発表」である。本書の著者はその「分類学の根幹」をなす記載論文を、分類学者以外の研究者にも発表できるようになってもらうことを目的としており、本書はこの目的のために極めて有用である。'と'訳者あとがき'に書かれている。確かに、この本は種を記載するための教科書となるだろう。
(鳴橋直弘)